

会員近況



愛知工業大学
経営工学教室 権 泰殷

私は、1967年に韓国から留学生としてきましたが、現在は大学に勤務しております。大学では、経営科学とその演習、そのほか会計学などを担当しています。

研究を続けているテーマは、会計情報論的アプローチによる在庫管理の研究と実体資本維持論に関する研究です。前者は早大の春日井博先生の指導をいただきながら主として日本経営工学で発表してきました。今年中は、なんとかしてまとめようと思っていますが、なかなか難しいそうです。後者は明大の故不破貞春先生の指導を受けまして勉強しました。昨年は日本会計研究学会で発表しましたが、今年は3月にその中部部会で発表しようと準備中であります。今後もっと研究しようと思っていますが、能力不足を痛感する次第です。

McKinsey &
Company, Inc. 西田 在賢

マネジメント・コンサルティングの会社に勤めています。と、このように自己紹介すると必ず説明を求められます。そこで、今回は McKinsey の概要をお話することにします。社名である“McKinsey”の由来は創立者シカゴ大学経営学教授で財務管理分野のエキスパートとして著名であった James McKinsey からきています。この会社の操業は1926年に始まり、50余年の歴史を持ち、この種の会社としては最古参であり、かつ、また、その間に蓄積されたノウハウは膨大なものです。現在、McKinsey 社はニューヨークに本部を置き、世界に23カ所のオフィスを開設しております。そのスタッフの構成は総勢1300名を教え、その大半は修士以上の学歴をもつもので占められております。また、スタッフの国籍も全部で28カ国を数えます。私の属する東京オフィスは丸の内に位置し、開設後、約10年を経たところです。実は自分の鼻を精一杯きかせて、この会社を捜しあてたの

が内心自慢だったのですが、入社後、大学の集いなどで森口繁一先生や松田武彦先生にお会いした際、McKinsey のことを話しましたところ、両先生はずっと以前から御存知とのことで、特に、ディビッド・B・ハーツ氏(McKinsey, ニューヨーク事務所の取締役)とは懇意で、本社を訪問されたこともあるとのことでした。

田辺製薬(株)
東京支社副支社長 久慈 光亮

私とORとの出会いは、1952年、後藤正夫先生のお導きで、日本で最初ともいえるOR研究グループに参加させていただいたことです。大学で専攻したのは薬品製造学だったのですが、企業人としての生活の他に、後藤先生はじめ多くの先達に恵まれたことが、私のその後の生活に大きな影響を与えました。その当時、わが国に導入された品質管理、マーケティング、マネジメント・リーダーシップなど経営管理の思想や技法に強くひかれ、1958年頃から、社外の講習会で講師活動をするまでになりました。現在は、主として企業内経営教育を担当している他、薬科大学で薬業経営を講義し、日本薬剤師会で薬業経済調査委員会を担当しています。国家財政に直接大きく関連をもつ国民医療費の増加傾向をどう抑制するかは全世界的問題で、わが国でも財政再建策にからんで世人の関心が高く、医療費中に占める医薬品費率の圧縮が強く主張されています。これからの医療経済をどうすればよいのか、皆様のご教示を期待しています。

次城大学工学部
情報工学科 宮村 鐵夫

昨年度まではORの講義を担当しておりましたが、本年度はORに直接関係するような講義は担当しておりません。ORの講義を担当して最も困惑したことは、ORとは何かということがよくわからなかったことです。そのときにはORの手法を羅列的に講義しただけで終わりましたので、学生にもORの真髄を教えることはできなかったと思っております。

このようなことで、今のところ直接ORに関係するような講義は担当しておりませんが、研究のほうは Survival data の解析などに興味をもっております。研究の方向は data の解析を中心とするのではなく、data の生じる背景までも含めて model を作っていかうとするものです。OR学会の方で、この方面に興味をもっていらっしゃる方も交流を深めたいと思っております。

この評価量が学会で認められるよう努力したいと思う。

日立製作所
システム開発研究所 中村 昂

近時、生産の合理化からオフィス事務の合理化へのソフトが云々されている。これは特に、マネジャー1人、または数人当りに1人の秘書が必要となる欧米のオフィスにおいて顕著である。

米国アトランタのNCCオフィスオートメーション会議3/3~3/5, カナダのナショナルオフィスエクシビジョン3/10~3/12, などに出席するほか、先進オフィスシステムの調査を試みてみた。

ワードプロセッサ, エレクトロニックメールなどの応用を主にした該分野の合理化は、確かにわが国より1歩先に試行され、第2次実験の段階にあることがわかった。

オフィスプロセスの構造が不透明の点, 対象がノンプログラマブルなマネジャーである点, などから, Petri Net. を用いたオフィスプロセス分析, 個人別分散DBのセマンティックな情報の解析, Easy To UseなQuery by Example などのデータ入力方式や Artificial Intelligence 分野からのアプローチ, ……等々の課題が取り上げられている。もちろん, メーカーのハード, ソフトの参入台戦はいうまでもない。

タイプを通常用いないわが国のオフィス特性の下で, 同様な進展を見るか否かは, 今後の問題だが, 合理化手段は相違するにせよ, いずれ上記した分野が, ORの対象の1つに登場することになるう。

岩手大学工学部
情報工学科 吉岡 良雄

1975年から, 計算機網に関する研究を始めた。計算機網は, 電話網と異なり, 各ノードでパケット(データ)の蓄積交換によって, 順次目的の地までそれを転送する。このようなふるまいから, 計算機網のノードを待ち行列システムとして解析しているものが多い。

計算機網に要求されることは, 利用度が高いこと, パケットの転送時間が小さいことの2点であろう。しかし, どの研究も, このどちらかについてだけ議論しているにすぎない。この原因は, 待ち行列システムにおける窓口を設計する場合, 評価量として, 待ち時間の許容限度を定めて行なっているからであろう。

私は計算機網の設計を通じて, 窓口の利用率を高くすることと呼ぶの滞在時間を小さくすることの2点を考慮した待ち行列システムの評価量を提案している。そして,

日本ユニパック(株)
大阪支店 支店長付 本多 邦年

今日のように多様化されたニーズに答えるシステムの開発が要求されるということは今までになかったことではないでしょうか。私のようにコンピュータ・メーカーに勤めるものにとって, システム開発をスムーズに有効に行なう方法を追求することは非常に重要であり, 私どもでもNUPS法というものを軸に, より多様化されたニーズに有効なシステムの開発方法を日夜研究しておりますが, 私は今これをもう少し広げて“知的生産の技術”や“発想法”らと関連づけて考えています。もう少し具体的に述べればKJ法, NM法, ワーク・デザイン, 東洋の合理化思想, 日本語の論理性, などとの関連性においてNUPS法を考えることです。まだ緒についたばかりで前途多難が予想されますがこんなのもORだと勝手にきめて, 少しでも様にしたいたいと考えて進めています。

大阪大学
溶接工学研究所 福田 収一

他の会員のの方々と異なり私の研究歴はかなり変わっております。機械工学科の大学院でランダム疲労に関する実験的研究で学位を取得し, その後大学に勤務してからは破壊の問題に有限要素法を適用する研究に移り, 主として弾塑性計算による数値解析を行ないました。

現在は溶接構造物の安全性, 信頼性解析, 溶接部の品質保証の問題を主として研究しておりますが, 溶接は種々の工学分野が関連し, また溶接工, 非破壊検査工など人間の因子も関与しているためOR的思考がきわめて必要な分野の1つではないかと感じています。溶接は生産と直接結びついているため, 常に実際に役立つかいないかが問題とされる分野なので, 実地に役立つ研究を旨として努力しています。特にあまりエレガントな解法は受入れられない場合もあるようで, 泥くさいORの接近ができないかと種々検討しているのが現状です。

最近では数理計画関係に関心をもっており, これからいろいろと応用してゆきたいと思っております。

訃報 大阪大学教授 高松俊朗殿は, 昭和55年9月15日午後4時45分, 胃ガンのため逝去されました。享年53才。謹しんでお悔み申し上げます。